

女子大学生における拒否に対する感受性と認知的統制が 対人ストレスコーピングに及ぼす影響について

The effect of rejection sensitivity and cognitive control on interpersonal stress-coping among the female university students

富田 りさ

跡見学園女子大学心理教育相談所

Risa Tomita

Atomi University Center for Educational and Psychological Counseling

要 約

拒否に対する感受性は対人関係における問題や苦痛を引き起こしやすいことから、精神的健康に対するネガティブな影響が指摘されている。そこで本研究では個人の思考や行動を調整する側面の認知的統制と対人ストレスコーピングに注目し、拒否に対する感受性が精神的健康に影響を及ぼすメカニズムを検討することを目的に質問紙調査を実施した。

拒否に対する感受性、認知的統制、対人ストレスコーピング、精神的健康の尺度から構成される質問紙調査を女子大学生 214 名に実施し、共分散構造分析による分析を行った結果、拒否に対する感受性の高さは、認知的統制のスキルである論理的分析と破局的思考の緩和の双方に負の影響を及ぼしていた。また、不適応的とされるネガティブ関係コーピングの選択しやすさ、および精神的健康の阻害されやすさに影響を及ぼすことが示された。

また、認知的統制のうち、論理的分析は適応的なポジティブ関係コーピングに有意な正の影響を及ぼす一方で、不適応的なネガティブ関係コーピングにも有意な正の影響及ぼすことが示唆された。また、破局的思考の緩和は解決先送りコーピングに有意な正の影響を及ぼすこと、さらに精神的健康にポジティブな影響を及ぼすことが示された。対人ストレスコーピングのうち、ネガティブ関係コーピングのみ精神的健康に有意なネガティブな影響が認められた。

これらの結果から、拒否に対する感受性の高いものは、認知的統制のスキルを使用しにくいこと、対人ストレス場面でより不適応的なコーピングを選択しやすいこと、そして、これらの認知的、行動的な特徴を介して精神的健康を阻害されやすいことが示唆される。

よって、拒否に対する感受性が高いものに対する支援として、認知的統制のスキルを獲得するための介入や、より適応的な対人ストレスコーピングの選択を促す心理的介入が、精神的健康を改善するうえで有用である可能性が考えられる。

【Key Word】 拒否に対する感受性、認知的統制、対人ストレスコーピング、精神的健康、対人関係

I. 問題と目的

1. 拒否に対する感受性

拒否に対する感受性とは、他者から拒否されることを不安を伴って予期し、すぐに知覚して過剰に反応しやすい傾向を指す。また、拒否に対する感受性が高いものは、他者を信頼し、安定的な対人関係を形成することが難しいこと、また拒絶への不安によって喚起される行動が対人関係を悪化させることが報告されている (Downey&Feldman, 1996)。

また、Downey&Feldman (1996) は拒否に対する感受性を愛着理論から捉えており、幼少期の拒絶された経験が表象として内在化され、拒否に対しての防衛的な情報処理や情動抑制が行われるようになり、そのために予め拒否を予期し、その拒否を避けることに最大限の情報処理資源をかたむけるようになることを説明している。

このように拒否に対する感受性は本来、自己防衛的に発達してきたものであるにも関わらず、かえって対人関係を悪化させてしまうことが指摘されている。Downey&Feldman (1996) は拒否に対する感受性が高いものは、相手の行動を「拒否している」と知覚しやすく、相手との関係性に不満を持ちやすいとしている。その結果相手に敵意や嫉妬を抱き、相手が自分から離れていくように仕向けてしまったり (Downey et al., 1998)、相手の曖昧な態度に攻撃的な反応をしやすかったりするために、建設的な関係が築かれにくいことも示唆されている (Downey&Ayduk, 2000)。そしてこれらの報告のように、拒否に対する感受性の高いものは、拒絶への強い不安が喚起されやすく、その対処が本人の意図とは反対に、

予期した拒絶を現実化してしまうことから、破滅的な自己成就予言を作り出してしまふ (鳥越, 2020) と考えられている。

また、拒否に対する感受性はパーソナリティ研究のなかで提唱され、発展してきた概念ではあるが、対人関係での問題や苦痛を引き起こしやすいことから、拒否に対する感受性と精神的健康においてもその関係が検討されてきており、これまで拒否に対する感受性が高いほど対人ストレス反応が高まりやすいこと (小川, 2003)、心身の健康が阻害されやすいこと (小川, 2004) が報告されている。また、拒否に対する感受性の高さは、対人ストレスを経験したときのコーピングに影響を及ぼすという報告もある。小川 (2006) は親密な相手、または重要な相手との間で対人ストレスを経験した際、拒否に対する感受性が高いものほどコーピングとして気晴らしを選択せず、放棄・諦めを選択する傾向があることを示している。

これらの先行研究をふまえると、拒否に対する感受性が精神的な健康に影響を及ぼすメカニズムを明らかにし、介入方法を検討することには意義があると考えられる。そこで本研究では、拒否に対する感受性が精神的健康に影響を及ぼすメカニズムを検討するうえで、個人の思考や行動を調整する側面に注目した。

2. 認知的統制

認知的統制とは、考え方を調節することによる制御であり、事象や刺激を認知して行動を制御することと定義されている (Bandura, 1977 / 1979)。そして Bandura (1977 / 1979) は刺激を解釈し検証する過程を通して、効果的な認知による制御が可

能になると、ストレスや不安を操作し、思考の問題に基づく多くの困難や苦痛を回避できるとしている。

甘利・馬岡（2002）は、認知療法の認知的技法と、認知のネガティブな歪みを統制する機能をもつ認知的統制の概念は重なるとしており、杉浦（2007）はセルフコントロールの観点から、ストレスを感じる状況におけるネガティブな思考を低減するスキルを測定する認知的統制尺度を作成している。また、この尺度を作成する過程で、認知的統制は、状況を客観的に分析し積極的に解決に取り組むスキルである「論理的分析」と、破局的思考から距離を置き思考の暴走を止めるスキルである「破局的思考の緩和」の2因子から構成されると報告している。

認知的統制尺度を使用した先行研究では、小野・古川（2010）が拒否に対する感受性を含む対人関係における過敏性は、認知的統制の論理的分析と破局的思考の双方に負の関連を示すと報告している。そしてその中で他者からの評価を懸念しやすい、他者および自己へのネガティブな認知を持ちやすい、自己表現を避けやすいという傾向も持つほど、認知的統制のスキルを用いていない可能性を指摘している。他にも、認知的統制の破局的思考の緩和は、心理的ストレス反応を軽減すること（新川ら、2014）、ストレスの有害な効果を和らげるという形で抑うつを予防すること（杉浦・杉浦、2003）が報告されている。

3. 対人ストレスコーピング

1) 拒否に対する感受性と対人ストレスの関連について

拒否に対する感受性は、対人関係ストレ

スを知覚しやすくすること（小川、2003）、また対人関係ストレスが抑うつに与える影響を調節すること（Chango et al., 2012）が報告されている。このことから、本研究では拒否に対する感受性が精神的健康に影響を及ぼす個人内の過程の、主に行動的な側面として、対人ストレスコーピングに着目する。

コーピングとは、能力を使い果たしてしまふと判断され、自分の力ではどうにもできないとみなされる「特定の環境から強制」と「自分自身の内部から強制」の双方、あるいは一方を、適切に処理し統制していこうとしてなされる、絶えず変化していく認知的努力と行動による努力であると Lazarus（1984 / 1991）は定義している。

2) 認知的統制と対人ストレスコーピング

認知的統制と対人ストレスコーピングとの関連を示唆する研究としては、Lazarus（1984）のストレス理論がある。Lazarus（1984）は、個人がある状況に遭遇すると、その状況が有害か無害か、もしストレスフルならどのようなコーピングを選択すべきかに関する認知的評価がなされるとしている。そして、その認知的評価に基づきコーピングの選択がなされ、ストレス状態を回避しようとする事、そして、それでも回避できなかった場合にストレス状態となることを述べている。

加藤（2007）は対人関係における認知的評価と対人ストレスコーピングの関連について検討し、対人ストレス状況において重要性や脅威といった認知的評価がコーピングの選択に深く関連していると述べている。これを考慮すると、認知的な評価をコントロールする認知的統制もまた、対人ス

トレスコーピングと関連することが予測される。

3) 対人ストレスコーピングと精神的健康

さらに、加藤 (2000) は対人ストレスコーピング尺度を作成し、ポジティブ関係コーピング、ネガティブ関係コーピング、解決先送りコーピングの3因子を抽出し、ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングは精神的健康に正の影響をあたえ、ネガティブ関係コーピングは精神的健康に負の影響を与えることを報告している(加藤, 2001)。よって、ポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングは適応的なコーピングであり、ネガティブ関係コーピングは不適応的なコーピングであることが考えられる。

4. 本研究の目的と意義

以上の先行研究から、拒否に対する感受性の高さは、対人関係におけるネガティブな認知を喚起しやすく、これらの認知に関する認知的統制を阻害する可能性が考えられる。またその結果として、不適応的な対人ストレスコーピングの選択、そして不適応的な対人ストレスコーピングを介して精神的健康にも影響を与えることが予測される。

そこで、本研究では、拒否に対する感受性が、認知的統制および対人ストレスコー

ピングを介して、精神的健康に及ぼす影響を検討する。

本研究は、様々な背景要因により、拒否に関する感受性が高まっているものへの支援の必要性、および臨床的介入を検討することに寄与すると考えられる。

5. 仮説

仮説は以下の通りとした。

仮説①：拒否に対する感受性の高さと認知的統制は負の相関を示す。

仮説②：拒否に対する感受性の高さは、より不適応な対人ストレスコーピングの選択と関連する。

仮説③：認知的統制の低さは、より不適応的な対人ストレスコーピングの選択と関連する。

仮説④：拒否に対する感受性が、認知的統制の低さを媒介として間接的に、また直接的に不適応的な対人ストレスコーピングに影響を及ぼし、さらに、不適応的な対人ストレスコーピングを介して、精神的健康にも負の影響をもたらす(図1)。

II. 方法

1. 調査対象および調査協力者

2022年7月～2022年10月の期間に、首都圏の大学に通う女子大学生を対象とし、紙面およびGoogle Formsによる調査

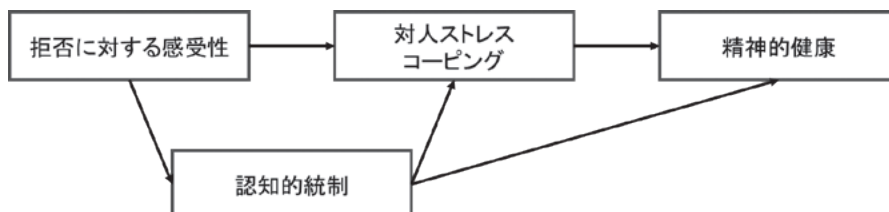


図1 仮説モデル

を実施した。回答の所要時間は約 10 分間であった。分析には完全回答の 214 名（平均年齢 19.33 歳，SD=1.47）のデータを用いた。

2. 倫理的配慮

調査は授業終了後に行い，調査票の最初に説明文を載せるとともに，口頭でも説明を行った。また，調査は無記名式とし，調査対象者からの同意は調査票への回答をもって得られたこととした。なお，本研究は跡見学園女子大学研究倫理審査委員会にて承認を得た（承認番号 倫院-22-014）。

3. 調査内容

1) フェイスシート

学年，年齢，性別を尋ねた。

2) 日本語版拒否に対する感受性測定尺度（本多・櫻井，2000）

拒否を認知しやすく，拒否に対して過剰に反応する程度を測定する尺度であり，18 の対人場面における，拒否に対する「心配（拒否されるのではないかという懸念の強さ）」と「予期（拒否される可能性の見積もり）」をそれぞれ 6 件法で評価する。各項目得点は心配得点と予期待点とを掛け合わせることで算出し，その合計点を場面の総数である 18 で割ることで，各参加者の拒否に対する感受性得点を算出した。得点が高いほど拒否に対する感受性が高いことを示す。

3) 認知的統制尺度（杉浦，2007）

認知的スキルを測定する尺度であり，「論理的分析」，「破局的思考の緩和」の 2 要因 11 項目からなる。4 件法で回答を求めた。得点が高いほどスキルが高いことを示す。

4) 短縮版対人ストレスコーピング尺度（加藤，2002）

対人ストレスイベントに対するコーピングを測定する尺度であり，「ポジティブ関係コーピング」，「ネガティブ関係コーピング」，「解決先送りコーピング」の 3 要因 15 項目からなる。4 件法で回答を求めた。得点が高いほどコーピングの使用頻度が高いことを示す。

5) GHQ 精神健康調査票 12 項目版（中川・大坊，2013）

精神健康状態を測定する尺度であり，1 要因 12 項目からなる。各質問項目に対し，それぞれ 4 種類の選択肢から回答を求めた。回答の程度に従って，左から順に 0 点，0 点，1 点，1 点とする GHQ 採点法で評価を行った。得点が高いほど精神的健康度が低いことを示す。

4. 分析方法

質問紙で得られた回答については，統計的な処理を行った。統計解析には SPSS（IBM SPSS Statistics Version 28）および Amos（IBM SPSS Amos Version 28）を使用した。

まず，相関分析により，各変数間の相関係数を確認したうえで，共分散構造分析を用いて仮説モデルの検証を行った。

さらに，各変数間の関連を相関分析および重回帰分析を用いて検討したうえでモデルの修正を試み，より良い適合度を示すモデルの検討も行った。

Ⅲ. 結果

1. 記述統計

拒否に対する感受性，認知的統制，対人ストレスコーピング，精神的健康の尺度得点について，平均および標準偏差を算出した（表 1）。

表1 各尺度得点の平均値と標準偏差

		平均	SD
拒否に対する感受性		12.14	4.69
認知的統制	論理的分析	16.03	3.62
	破局的思考の緩和	10.50	3.29
対人ストレスコーピング	ポジティブ関係コーピング	6.83	3.06
	ネガティブ関係コーピング	5.25	3.99
	解決先送りコーピング	7.08	4.08
精神的健康		4.95	3.36

2. 相関分析

拒否に対する感受性尺度, 認知的統制尺度, 短縮版対人ストレスコーピング尺度, GHQ 精神健康調査票 12 項目版に関する質問項目の関連を検討するため, 相関分析を行った (表2)。

各尺度内での相関関係をみると, 認知的統制の論理的分析と破局的思考の緩和に中程度の正の相関がみられた。また, 対人ストレスコーピングのネガティブ関係コーピングと解決先送りコーピングに弱い正の相関がみられた。

各尺度間での相関をみると, 拒否に対する感受性は, 認知的統制の論理的分析, 破局的思考の緩和, そして対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピング, 解決

先送りコーピングとそれぞれ弱い負の相関がみられ, 精神的健康と弱い正の相関がみられた。認知的統制の論理的分析は, 対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピング, 解決先送りコーピングとそれぞれ弱い正の相関がみられ, 精神的健康と弱い負の相関がみられた。認知的統制の破局的思考の緩和は, 対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピングと弱い正の相関, 解決先送りコーピングと中程度の正の相関, 精神的健康と中程度の負の相関がみられた。対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピングは, 精神的健康と弱い負の相関がみられた。

3. 重回帰分析

1) 認知的統制を従属変数とした重回帰分析

表2 各尺度間の相関関係

	拒否に対する感受性	認知的統制		対人ストレスコーピング			精神的健康
		論理的分析	破局的思考の緩和	ポジティブ関係コーピング	ネガティブ関係コーピング	解決先送りコーピング	
拒否に対する感受性	—						
認知的統制	論理的分析	-.293 **	—				
	破局的思考の緩和	-.361 **	.506 **				
対人ストレスコーピング	ポジティブ関係コーピング	-.265 **	.283 **	.256 **	—		
	ネガティブ関係コーピング	.14 *	.082	-.037	-.094	—	
	解決先送りコーピング	-.201 **	.229 **	.427 **	.122	.264 **	—
精神的健康	.308 **	-.259 **	-.469 **	-.211 **	.166 *	-.15 *	—

* $p < .05$, ** $p < .01$

認知的統制の下位尺度を従属変数、拒否に対する感受性尺度を独立変数とした重回帰分析を行った（表3）。

その結果、拒否に対する感受性は認知的統制の破局的思考（ $\beta = -.293, p < .001$ ）と、破局的思考の緩和（ $\beta = -.361, p < .001$ ）に有意な影響を及ぼしていた。

2) 対人ストレスコーピングを従属変数とした重回帰分析

対人ストレスコーピングの下位尺度を従属変数、第1ステップとして拒否に対する感受性、第2ステップとして認知的統制の下位尺度を独立変数として投入する階層的重回帰分析を行った。変数選択は全投入法を用いた（表4）。

その結果、ポジティブ関係コーピングを従属変数としたとき、拒否に対する感受性（ $\beta = -.175, p < .05$ ）、認知的統制の論理的分析（ $\beta = .18, p < .05$ ）が有意な影響を及ぼしており、変数全体はポジティブ関係コーピング下位尺度の12.3%を説明していた（ $R^2 = .123$ ）。

また、ネガティブ関係コーピングを従属変数としたとき、拒否に対する感受性（ $\beta = .165, p < .05$ ）、認知的統制の論理的分析（ $\beta = .16, p < .05$ ）が有意な影響を及ぼしており、変数全体ではポジティブ関係

コーピング下位尺度の3.8%を説明していた（ $R^2 = .038$ ）。

そして、解決先送りコーピングを従属変数としたとき、認知的統制の破局的思考の緩和（ $\beta = .403, p < .001$ ）が有意な影響を及ぼしており、変数全体では解決先送りコーピング下位尺度の18.5%を説明していた（ $R^2 = .185$ ）。

3) 精神的健康を従属変数とした重回帰分析

精神的健康の下位尺度を従属変数、第1ステップとして拒否に対する感受性、第2ステップとして認知的統制の下位尺度、第3ステップとして対人ストレスコーピングの下位尺度を独立変数として投入する階層的重回帰分析を行った。変数選択は全投入法を用いた（表5）。

その結果、感受性拒否に対する感受性（ $\beta = .129, p < .10$ ）、認知的統制の破局的思考の緩和（ $\beta = .407, p < .001$ ）、対人ストレスコーピングのネガティブ関係コーピング（ $\beta = .121, p < .10$ ）が有意な影響を及ぼしており、精神的健康の26.3%を説明していた（ $R^2 = .263$ ）。

4. 共分散構造分析

最後に、拒否に対する感受性が精神的健康に影響を及ぼすモデルを、本研究の仮説

表3 認知的統制の下位尺度を従属変数とした重回帰分析

	論理的分析	破局的思考の緩和
	β	β
拒否に対する感受性	-.293 ***	-.361 ***
R	.293	.361
R^2	.086	.131
調整済み R^2	.081	.127
ΔF	19.859 ***	31.853 ***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

表4 対人ストレスコーピングの下位尺度を従属変数とした階層的重回帰分析結果

ポジティブ関係コーピング	標準化回帰係数(β)		ネガティブ関係コーピング	標準化回帰係数(β)	
	Step1	Step2		Step1	Step2
拒否に対する感受性	-0.265 ***	-0.175 *	拒否に対する感受性	.14 *	.165 *
論理的分析		.18 *	論理的分析		.16 *
破局的思考の緩和		.101	破局的思考の緩和		-.059
R	.265	.351	R	.14	.196
R ²	.07	.123	R ²	.019	.038
調整済みR ²	.066	.111	調整済みR ²	.015	.025
ΔR^2	.07	.053	ΔR^2	.019	.019
ΔF	15.958 ***	6.373 **	ΔF	4.208 *	2.063

解決先送りコーピング	標準化回帰係数(β)	
	Step1	Step2
拒否に対する感受性	-.201 **	-.053
論理的分析		.009
破局的思考の緩和		.403 ***
R	.201	.43
R ²	.04	.185
調整済みR ²	.036	.173
ΔR^2	.04	.144
ΔF	8.92 **	18.558 ***

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

モデルと、相関分析および重回帰分析の結果をふまえて探索的に作成し、共分散構造分析を用いて、データの適合度の検討を行った(図2)。有意でないパスを削除し、分析をくり返した結果、GFI=.995、AGFI=.980、CFI=1.00、RMSEA=.00であり、適合度は

十分であった。

図2に示すように、認知的統制について、論理的分析を低める要因として拒否に対する感受性が挙げられ($\beta = -.29$, $p < .001$)、論理的分析の9%が説明された($R^2 = .09$)。また、破局的思考を低める要因としても拒

表5 精神的健康を従属変数とした階層的重回帰分析結果

	標準化回帰係数(β)		
	Step1	Step2	Step3
拒否に対する感受性	.308 ***	.158 *	.129 †
論理的思考		-.006	-.014
破局的思考の緩和		-.409 ***	-.407 ***
ポジティブ関係コーピング			-.061
ネガティブ関係コーピング			.121 †
解決先送りコーピング			.028
R	.308	.492	.513
R ²	.095	.242	.263
調整済みR ²	.091	.231	.242
ΔR^2	.095	.147	.021
ΔF	22.197 ***	20.433 ***	1.98

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

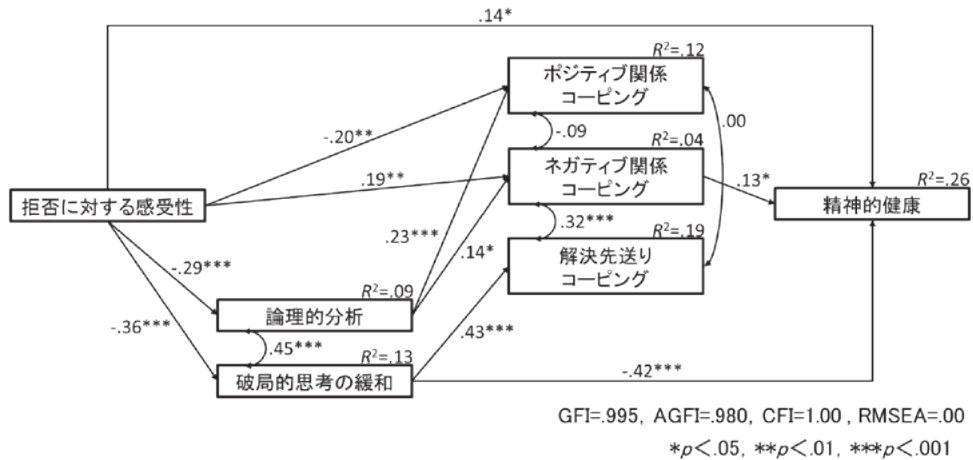


図2 拒否に対する感受性および認知的統制が精神的健康に与える影響についてのパス図

否に対する感受性が挙げられ、破局的思考の13%が説明された ($R^2=.13$)。

短縮版対人ストレスコーピング尺度については、ポジティブ関係コーピングを低める要因として拒否に対する感受性 ($\beta = -.20, p < .01$)、高める要因として認知的統制の論理的分析 ($\beta = .23, p < .001$) が挙げられ、ポジティブ関係コーピングの12%が説明された ($R^2=.12$)。また、ネガティブ関係コーピングを高める要因として拒否に対する感受性 ($\beta = .19, p < .001$)、認知的統制の論理的分析 ($\beta = .14, p < .05$) が挙げられ、ネガティブ関係コーピングの4%が説明された ($R^2=.04$)。そして解決先送りコーピングを高める要因として認知的統制の破局的思考の緩和 ($\beta = .43, p < .001$) が挙げられ、解決先送りコーピングの19%が説明された ($R^2=.19$)。

精神的健康にネガティブな影響を与える要因としては拒否に対する感受性 ($\beta = .14, p < .05$)、認知的統制の破局的思考の緩和 ($\beta = -.42, p < .001$) が挙げられ、精神的健康の26%が説明された ($R^2=.26$)。

IV. 考察

本研究では、拒否に対する感受性が認知的統制と対人ストレスコーピングを介して間接的に、また直接的に精神的健康に影響を及ぼす仮説モデルを検討し、探索的にモデルの修正を試みた。共分散構造分析の結果から、修正後のモデルの適合度は十分であり、予測した通り、拒否に対する感受性は認知的統制および対人ストレスコーピングを介して、もしくは直接的に精神的健康の低さへ影響を及ぼすことが示された。

拒否に対する感受性、認知的統制、対人ストレスコーピング、精神的健康の関連について、先行研究もふまえて考察を行う。

1. 拒否に対する感受性と認知的統制の関連

拒否に対する感受性を独立変数、認知的統制を従属変数とした重回帰分析、および共分散構造分析の結果より、拒否に対する感受性は認知的統制の論理的分析と破局的思考の緩和の双方に負の影響を及ぼしていることが示され、仮説①は支持された。

この結果は小野・古川 (2010) が示した

対人関係における過敏性は、認知的統制の論理的分析と破局的思考の双方に負の関連を示すという結果、および小川（2003）の拒否に対する感受性が高いものは対人イベントをネガティブに評価しやすいという結果と一致するものであった。これらの結果から、対人関係において他者から拒否されることを、不安を伴って予期し、それを知覚し過剰に反応しやすいものほど、認知的統制のスキルを用いにくいという可能性が示唆された。

2. 拒否に対する感受性と対人ストレスコーピングの関連

本研究では、拒否に対する感受性と対人ストレスコーピングの関連について、共分散構造分析を用い、直接的な関連と認知的統制を介した間接的な関連を検討した。

直接的な関連については、拒否に対する感受性は、ポジティブ関係コーピングに負の影響、ネガティブ関係コーピングに正の影響を及ぼしており、仮説②は支持された。

拒否に対する感受性が高いものは、日常的に関係を放棄・破壊するようなネガティブ関係コーピングを選択しやすいという本研究の結果は、小川（2006）の親密な相手や重要な相手と間でストレスを経験した際に、拒否に対する感受性が高いほどコーピングとして気晴らしを選択せず、放棄・諦めを選択する傾向にあるという報告と矛盾しないものであった。そして、本研究では積極的に関係を修復し、より良い関係を築こうとするポジティブ関係コーピングを選択しにくい可能性も示唆された。

このことから、拒否に対する感受性が高いものは、日常的に関係を放棄・破壊するネガティブ関係コーピングを選択しやす

く、積極的に関係を修復し、より良い関係を築こうとするポジティブ関係コーピングをとりにくい可能性が考えられる。

また、認知的統制を介した間接的な関連については、拒否に対する感受性は、論理的分析の低さを介して間接的にポジティブ関係コーピングとネガティブ関係コーピングに負の影響を及ぼしていること、そして破局的思考の緩和の低さを介して、イベントを問題視せずに無視するような解決先送りコーピングに負の影響を及ぼしていることが示され、仮説③は部分的に支持された。

この結果は、松本（2008）による、破局的思考の緩和は自己の抑うつ気分や自己に注意を向け、くよくよと考えこむネガティブな内省を低減し、論理的分析は抑うつ気分の原因や問題を解決しようとする問題への直面化を促進するという報告と矛盾しないものであった。

一方で論理的分析がネガティブ関係コーピングに正の影響を及ぼしたことについては、本研究の仮説と合致しないものであった。甘利・馬岡（2002）は認知的統制の思考と行動の検討は抑うつを直接強める効果と、自己効力感を介して間接的に抑うつや不安を低減させる効果があることから、思考と行動の検討のしかたによって、思考の様式に基づく困難を回避できると述べている。このことから、論理的分析はネガティブ関係コーピングを促進する可能性も否定できないことをふまえて、思考と行動の検討方法を工夫する必要があると考えられる。

また、本研究では論理的分析と破局的思考の緩和に中程度の相関がみられた。先行研究においても、論理的分析は破局的思考

の緩和と関連しているという報告があり(甘利馬岡, 2002; 川村・及川, 2015; 石川・西山, 2020), 本研究の結果もこれと矛盾しないものであった。そして先行研究では, 論理的分析が破局的思考の緩和に影響を与えることが報告されており(甘利・馬岡, 2002; 川村・及川, 2015; 石川・西山, 2020), 論理的分析が破局的思考を介して, 対人ストレスコーピングに影響を与えている可能性も考えられた。

これらの結果から, 拒否に対する感受性は, 対人ストレスコーピングの選択に直接的, および認知的統制を介して間接的に影響を及ぼす可能性が示唆された。

3. 拒否に対する感受性と精神的健康の関連

本研究では, 拒否に対する感受性と精神的健康の関連について共分散構造分析を用いて検討した。その結果, 拒否に対する感受性は直接的に精神的健康にネガティブな影響を及ぼすことが示唆された。

また, 認知的統制および対人ストレスコーピングを介した間接的な影響として, 認知的統制の破局的思考の緩和の低さを介して, 精神的健康にネガティブな影響を及ぼしていることが示唆され, 仮説④は部分的に支持された。

拒否に対する感受性は精神的健康の低さを直接説明することについては, 小川(2003)の拒否に対する感受性の高さは対人ストレスの知覚を促進するという報告と一致するものであった。

また本研究の破局的思考の緩和が精神的健康の高さに正の影響を及ぼすという結果は, 新川ら(2014)の認知的統制の破局的思考の緩和は心理的ストレス反応を低減す

るという報告や, 杉浦(2003)の破局的思考の緩和が高いとストレスが強い状況でも抑うつになりにくいという報告と矛盾しないものであり, 破局的思考を抑えるスキルが高いほど, 精神的健康が阻害されにくいことが示唆された。

対人ストレスコーピングと精神的健康の関連については, 加藤(2001)はポジティブ関係コーピングと解決先送りコーピングは精神的健康を向上させ, 一方ネガティブ関係コーピングは精神的健康を阻害すると報告しており, これは本研究の結果と必ずしも一致しなかった。本研究は横断的な研究であることから, 積極的な対人ストレスコーピングと精神的健康との関係が明確に示されなかった可能性がある。対人ストレスコーピングと精神的健康との関係については, 縦断的な関連も含めて, 今後検討する必要があると考えられる。

4. 総合考察

本研究では女子大学生を対象にアンケート調査を行い, その結果から, 拒否に対する感受性の高いものは, 普段から認知的統制のスキルを使用しにくく, 対人ストレス場面でのコーピングはより不適応的なものを選択しやすく, 精神的健康が阻害されやすいことが示唆された。このことから, 拒否に対する感受性が高いものは日頃から心理的苦痛を感じやすく, そこに支援ニーズがあると考えられる。

さらに, 本研究では拒否に対する感受性が精神的健康に影響を与える過程において, どのような認知的統制のスキルと対人ストレスコーピングが媒介されているのかについて検討した。

その結果, 認知的統制のうち, 論理的分

析は対人ストレスコーピングのポジティブ関係コーピングに正の影響を及ぼすこと、一方でネガティブ関係コーピングへの正の影響を介して、精神的健康にネガティブな影響を及ぼす可能性も示唆された。また、破局的思考の緩和は対人ストレスコーピングの解決先送りコーピングに正の影響を及ぼすこと、精神的健康にポジティブな影響を及ぼすことが示唆された。そして対人ストレスコーピングのうち、ネガティブ関係コーピングは精神的健康にネガティブな及ぼすことが示唆された。

最後に、本研究の結果を踏まえて、拒否に対する感受性の高いものに対する心理支援のありかたについて考察する。本研究の結果から、拒否に対する感受性が高いものは、対人ストレス場面で論理的分析が行いにくく、対人ストレスを積極的に解決する対処を選択しにくい可能性が考えられる。その結果、対人ストレスによる問題が解決されず維持したり、対処ができないことで自己効力感が低下し、精神的健康にネガティブな影響を及ぼしたりすることが考えられる。さらに、拒否に対する感受性が低いものは、破局的思考の緩和が行われにくく、対人ストレスについて考えないようにする対処もなされないため、対人ストレスによる影響を受けやすいことが示唆される。このように様々な認知的統制の特徴や、対人ストレスコーピングの特徴が、拒否に対する感受性の高い人における困難を引き起こしていることが推察される。

甘利・馬岡（2002）は認知のネガティブな歪みを統制する機能がある認知的統制と、認知療法の認知的技法の概念は重なる部分が多いと述べており、認知行動療法的

なアプローチが認知的統制のスキル獲得に寄与する可能性が考えられる。また、坂本（1997）は否定的な思考に没頭することは、抑うつ素因として重視されると述べており、自らの否定的な思考を統制する破局的思考の緩和を促すことは精神的健康を維持するために重要であると考えられる。

そして、本研究の結果から、精神的健康に負の影響を与える不適応的な対人ストレスコーピングを選択するものに対し、精神的に正の影響を与える対人コーピングが行えるよう、コーピングに介入する形で援助を行うことも可能であると考えられる。また、加藤・今田（2001）は個人が遭遇したストレスイベントが同一である場合、使用されるコーピングはその個人が置かれている状況が変化しない限り比較的安定したものであると報告しており、精神的健康にネガティブな影響を与える対人ストレスコーピングを選択しているところに、援助ニーズを見いだせる可能性も考えられる。

以上のように、拒否に対する感受性が高いものに対して、認知的統制を促す関わりや、対人ストレスへの対処法について介入する支援が、精神的健康を保つ一助となることが考察される。

5. 本研究の課題と今後の展望

本研究では女子大学生のみを対象としたが、認知的統制は合計点および論理的分析において、女性よりも男性が高いという性差が報告されており（小野・古川，2010）、今後は男子大学生を対象とした調査も実施する必要があると考えられる。

また本研究は横断的な研究であるため、因果関係については十分に示されたとはいえない。実際に、認知的統制と対人ストレ

スコーピングの関係については、本研究のモデルを作成する上で参照した先行研究とは異なり、行動的対処が認知的統制の論理的分析に寄与するという研究もあり(川村・及川, 2015), 認知的統制は対人ストレスコーピングの単なる予測因というより、相互に関連を持ちながら精神的健康に影響を及ぼしているとも考えられる。今後、認知的統制と対人ストレスコーピングの相互的な影響については、縦断的な研究や介入研究を行うことで、明らかにすることができると考えられる。

引用文献

甘利知子・馬岡清人(2002). 認知的統制と自己効力感が女子大学生の抑うつと不安に及ぼす影響. 日本女子大学大学院紀要家政学研究所・人間生活学研究所, 8, 29-39.

Bandura, A. (1977). *Social Learning Theory*. 原野広太郎監(訳)(1979). 社会的学習理論. 金子書房.

Chango, J. M., McElhaney, K. B., Allen, J. P., Schad, M. M., & Marston, E. (2012). Relational stressors and depressive symptoms in late adolescence: Rejection sensitivity as a vulnerability. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 40(3), 369-379.

Downey, G., & Feldman, S. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(6), 1327-1343.

Downey, G., Freitas, A. L., Michaelis, B., & Khouri, H. (1998). The self-fulfilling prophecy in close relationships: Rejection sensitivity and rejection by romantic part-

ners. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75(2), 545-560.

Downey, G., Feldman, S., & Ayduk, O. (2000). Rejection sensitivity and male violence in romantic relationships. *Personal Relationships*, 7(1), 45-61.

本多潤子・桜井茂男(2000). 日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成. 筑波大学心理学研究, 22, 175-182.

石川いずみ・西山薫(2020). 適応的・不適応的な反すうへ認知的統制が与える効果の検討. 北海道心理学研究, 42, 50.

加藤 司(2000). 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成. 教育心理学研究, 48(2), 225-234.

加藤 司(2001). 対人ストレス過程の検証. 教育心理学研究, 49(3), 295-304.

加藤 司(2002). 短縮版ストレスコーピング尺度の信頼性と妥当性の検証. 神戸女子学院大学学生相談室紀要, 7, 17-22.

加藤 司(2007). 対人ストレス状況における認知的評価, コーピング, 情動の関連性について. 健康心理学研究, 20(2), 18-29.

加藤 司・今田 寛(2001). ストレス・コーピングの概念. 人文論究, 51(3), 37-53.

川村 綾・及川 恵(2015). 認知的統制の媒介による行動的対処と抑うつとの関連. パーソナリティ研究, 24(2), 155-158.

Lazarus(1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer Publishing Company. 本明 寛・春木 豊・織田正美(監訳)(1991). ストレスの心理学－認知的評価と対処の研究－. 実務教育出版.

松本麻友子(2008). 拡張反応スタイル尺度の作成. パーソナリティ研究, 16(2),

209-219.

中川泰彬・大坊郁夫 (2013). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引. 日本文化科学社.

小川万理子 (2003). 拒否に対する感受性とライフイベント, ストレス反応との関連. 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 1020.

小川万理子 (2004). 拒否に対する感受性とライフイベント, ストレス反応との関連 (2). 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 955.

小川万理子 (2006). 拒否に対する感受性と対人ストレスへのコーピングとの関連. 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 15, 36-37.

小野恵里香・古川真人 (2010). 対人関係における感受性と認知的統制. 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 12, 115-124.

坂本真士 (1997). 自己注目と抑うつ

社会心理学. 東京大学出版会.

新川広樹・西塚拓海・富家直明 (2014). 大学生の社会的スキルと認知的統制がストレス反応に及ぼす影響. 日本教育心理学会総会発表論文集, 第 56 回総会発表論文集, 483.

杉浦知子・杉浦義典 (2003). 認知的統制のストレス緩衝効果. パーソナリティ研究, 12 (1), 34-35.

杉浦知子 (2007). ストレスを低減する認知的スキルの研究. 風間書房.

鳥越淳一 (2020). 拒絶感受性に関する海外の研究動向と今後の日本における研究展望. 開智国際大学紀要, 19, 111-120.

付記

本論文に関して, 開示すべき利益相反事項はない。また, 本研究につきまして, ご指導くださいました酒井佳永教授に感謝申し上げます。